

FUBAR2021 従軍記

この物語はFUBAR2021を筆者の主観で綴ったものになります。

一部、表現として状況、言い回しセリフ等を誇張、変更しているか所がございます。。



Klaus Schmid

クラウス・シュミット

(終戦時 上級曹長)

1941年から始まったソビエト—ボリシェヴィキとの戦いは激しさを増しており、1943年には私の所属する部隊も東部戦線へと移動になった。

当時は長年勤めた工兵大隊から歩兵科工兵小隊へ転属、そこから更に連隊の補給へ異動となったばかりであった。



左：現地民から物資を受領する筆者。

東部戦線のボリシェヴィキの尖兵は今まで戦ったどの国の兵士より粘り強く強力であった。

連隊の人員は次々と損耗し、下士官不足から畑違いではあったが歩兵小隊へ転属され小隊長として戦闘に従事した。

1944年の一月に負傷。連隊の再編成に伴ってドイツ本国へと戻って来た。

1944年6月にアメリカ、イギリスを中心とした連合国軍はフランスに上陸。我が国は再び二つの戦線に挟まれることとなっていた。

再編成された連隊は第221擲弾兵連隊と名を変え、フランス—西部戦線へと移動することとなった。

私は第一中隊の第三小隊を指揮することになった。

再編された第三小隊の分隊長の顔ぶれはさほど変わってはいなかった。

東部戦線で苦楽を共にしたリッペ軍曹、シャハテル伍長が第一、第二分隊長についていた。

頼もしい限りだ。

第三分隊長はこの再編成で新たに配属されはザルツフント伍長がついた。

彼の細やかな仕草から真面目な性格が十分伝わってくる。こちらも期待できそうだ。

しかし、小隊の顔ぶれは大分変った。古参の兵は減り、国民擲弾兵やユーゲント上がりの若い兵が目についた。

連隊がミノカモに到着すると師団では攻勢の準備が進められていた。

詳しい規模は聞かされなかったが近いうちに反攻作戦を行い連合軍を追い返すらしい。大量の物資が搬入されているのを見て我々はまだまだ戦えると確信した。

11月に入ると反攻作戦がいよいよ決行されると耳にした。私は補給係時代の伝手を使って小隊分のワインを入手した。作戦が始まったなら小隊員に振舞えるように。

中隊長のバウアー大尉に各小隊長が呼ばれた。作戦決行は11/14。連隊はタジミから19号線を経由してカスガイへと進出すると伝達された。

敵はナイツ峠と呼ばれる地域に約一個大隊強が展開していると偵察から報告があったらしい。

我が第一中隊を含む第一大隊は19号線北の敵を掃討し19号線を進む第三大隊の進出を支援する命令を受けていた。第一大隊の先頭はもちろん我が中隊である。

私は中隊長からの命令下達を受けて直ぐに作戦地域の地図を受け取りに行き、各分隊長を集め命令を下達した。分隊長たちの面持ちは堅かった。分隊員の練度に一抔の不安があるのだろう。なので、中隊の前進開始までの時間を使って僅かながらも戦闘訓練を施した。やれることは何でもやっておくべきだ。

私が歩いていると”メッサー”シュミットと呼び止められた。工兵大隊に所属していたころ私はそのように呼ばれていたことがあった。”メッサー（ナイフ）”のように切れ味が良いかららしい。

久しく呼ばれていなかったため、最初は誰のことかと首を捻ったが、その名を呼びながら嬉しそうに近づいてくる男をみて思い出したのだ。

彼は工兵大隊時代の部下だった男でゲオルグ・キーゼンという。気さくで面白い奴だ。

久々にあった彼は伍長に昇進していた。今では一個分隊を率いる身だという。聞けば彼の部隊も攻勢に参加するらしい。さらに何の巡りあわせかキーゼンの中隊が我が中隊を支援してくれるというではないか！

再開を喜びながら話をすると工兵時代の部下たちもそのほとんどが無事だという。損耗率の高い工兵において知ってる顔が多く生き残っていることに素直に喜んだ。

中隊は各小隊ごと集結地に向け前進した。

Jaboの襲撃を避けるため移動はもっぱら夜間に行われた。

慎重に移動したおかげか、それとも天の導きか第三小隊は損害を負うことなく集結地へと到着した。幸先の良いスタートだ。

しかし、すべての隊が順調だったわけではなかった。

ヴィルヘルム少尉の第一小隊と工兵は空爆を受け少くない損害を負ったようだ。特に第一小隊は酷く戦闘行動は無理だろう。

残った工兵は各小隊に配属された。第三小隊にはキーゼンの分隊がやって来て。元は10人～15人はいたであろう分隊は六人にまで減っていた。

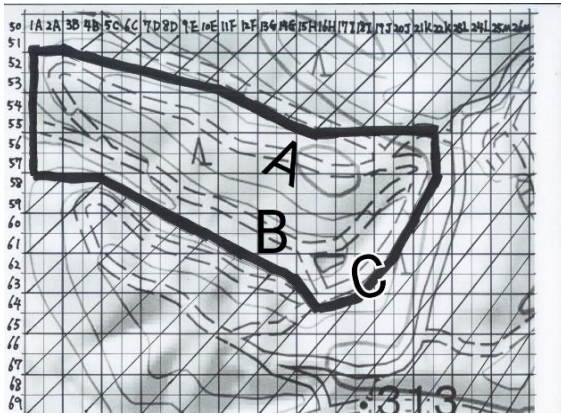
何かが違えばああなったのは我々だったかもしれない。

夕食はフードコンテナで運ばれてきた蒸かした芋とヴルスト入りの豆スープだ。

攻勢前なので糧食班も気前が良くなったのか大量のヴルストをみて心なしか兵たちは機嫌がよさそうだった。

私はここで各分隊へ用意していたワインを振る舞った。

モーゼルワインとまではいかなかったが白ワインを一瓶ずつ分隊へ渡す。それなりの出費だったが兵の士気が上がるなら安いものだろう。



右

第三小隊各分隊長と
筆者。手前の人物は
中隊長のバウアー大
尉

左
第三小隊作戦地域図



11/13の夜間になって攻撃のための斥候を放った。私も将校斥候として3人の部下を連れ斥候に赴いた。月明りのもと敵に接近すると遠くでライトが光るのが見えた。敵前だというのにヤンク共は暢気なことだ。斥候に連れてきたフォルトナーがワイヤー式の地雷を見つけた。触雷寸前だった彼の顔面は暗闇でも判るほど蒼白だった。

私が手早く地雷を無力化するとフォルトナーとキールを先行させた。長らく小隊本部要員として共に戦ったフォルトナーの技量を信用してのことだ。彼は一切音を立てることなく前進するとC道と名付けた道路上に鉄条網を見つけた。

鉄条網は上から見ると四角い箱のように構築されていた。鉄条網があるということはこの近くで敵は一戦交えるつもりらしい。

地図を見れば丁度良い位置に小屋があるらしい。展開先の目星をつけると私たちは撤収した。

他の斥候班も敵歩哨のおおむねの位置をつかんで戻ってきていた。

今度は主陣地の位置を探るためリッペ軍曹たちを派遣した。斥候には古参の良く訓練された兵士を選抜した。彼らに無理なら小隊のどの人員にも無理だろうと言える人選だ。

同時にキーゼルの工兵とザルツフント伍長の第三分隊がそれぞれA道、B道の障害処理へと向かった。

工兵はA道の障害を探索し発見次第除去する。(障害は確認できず空振りに終わったが)

第三分隊はC道の鉄条網の撤去に向かった。切断し人員通路を作成する為である。可能であれば敵による復旧を阻害するため杭を持ち帰れと命令した。

第三分隊を派遣してしばらくすると中隊長がやって来た。現状を説明すると「C道の障害は必ず除去せよ。お前が行ってみて来い」と指示された。

第二分隊からヴェーバー、S.ホフマンの二人の二等兵を借り受け第三分隊の後を追う。

途中、数発の銃声が聞こえた。第三分隊に損害がでたのだろうか？ 私は足早に夜道を進んだ。

しばらく行くと道路上にたむろする人影が見えた。誰何をするドイツ語と合言葉が帰って来た。

そこにいたのは第三分隊であった。ザルツフント伍長から報告を受ける。

どうやら第三分隊は無事に鉄条網を除去、さらには杭を含む敵の資材を丸々奪ってきたようだ。敵の抵抗は一切なかった。

敵の対応の無さに困惑しながらもザルツフント伍長に小屋付近にいると思われる敵に接近し出方を探るように指示を出すと私は来た道に戻った。

集結地に戻り、中隊長に鉄条網除去を報告すると中隊長は顔をほころばせて何度もうなずいていた。

ところで先ほどの銃声は何だったのか？ そう思っていると第一分隊のリットベルク伍長勤務上等兵が駆け込んできた。

彼は息も絶え絶えになりながらうわ言のように「小隊長、小隊長」と呟いていた。

水を飲ませ、彼の息が整うのを待ってから報告を受けた。

斥候にて他の人員の生死は不明。自身はリップペ軍曹の指示で情報を持ち帰ったという。

彼らの得た情報は非常に有益なものであった。敵は縦深陣地を構築し多数の鉄条網を構築、有線電話の電話線も確認したという。

帰路にて敵の歩哨と遭遇。戦闘になり、敵（イギリス兵）二名を射殺するも斥候班は散りじりになったそう
だ。リップペ軍曹はこれまで得た情報を何とか持ち帰るためにも陽動となり、その隙をついてリットベルクは
戻ってきたと言う。

これは、彼を除いて全滅か……と思った矢先にリップペ軍曹と他二人が戻って来た。さすがは東部戦線を戦い抜
いた猛者だ！

しかし、無傷とはいかなかった。斥候に出た六人の内二名が戻らなかった。ミハエル二等兵は頭部を撃たれて
即死、バルト上等兵は地雷を踏みその後行方が分からなくなったと報告を受けた。

それからすぐにザルツフント伍長たちも戻って来た。

予想通り、小屋に敵は居たそう。彼らが接近するとヤンク達は一斉に射撃を加えてきたという。幸い射撃は
明後日の方角に飛んでいき、損害はなかった。



左：リットベルク伍長勤務上等兵（右から二人目）から報告を受ける筆者（左から二人目）

夜間の警戒は第一小隊の残余が就いてくれることとなった。彼らは明日の攻撃に参加できないのでせめて
これくらいはと引き受けたのだ。ありがたいことだ。

小隊員を休ませるよう指示を出した後、中隊長、迫撃砲小隊長と協議し作戦計画を一部修正する。

小隊の宿営地に戻ると大部分の兵はすでに休んでいた。

私は秘蔵のモーゼルワインをあけるとまだ起きていたリップペ軍曹、シャハテル伍長らと軽い雑談をしながら杯
を交わした。

朝、まだ日も登らないうちから我々は活動を始めた。

昨夜の内に受領していた朝食（オートミール）を取らせ弾薬、糧食の配布、砲兵隊との最終確認等慌ただしく
動いた。

7：45には小隊は態勢を整え、中隊長からの訓示を受ける。そしてそのまま小隊は宿営地から前進を開始し
た。

前進順序は第二分隊、小隊本部、第一分隊、工兵分隊、第三分隊の順だ。

8：05ごろ小隊は攻撃発揮位置に到着。準備砲撃を待って予定通り第二分隊がA道、第一分隊がC道へと前進を
開始した。

しかしここで、初の実戦なのか血気盛んな一部の兵が準備砲撃中なのにも関わらず砲撃の中に向かって前進を

続け、味方の砲撃に巻き込まれた。

速成訓練だけではやはり兵士の質は落ちるだろう、栄あるドイツ軍人の質も落ちたのだ思わせれた。なんとも幸先の悪い出だしとなった。

一、二分隊が戦闘を開始するとすぐに敵の阻止砲撃が始まった。激しい砲撃が降り注いだがそのほとんどは我々の後ろや前に落ち損害は軽微であった。対してこちらの砲撃は的確に敵を捕らえていた。

前哨と思われる敵は会敵から20分もしないうちに尻尾を巻いて逃げていくのが遠巻きに見えた。

C道の鉄条網があった位置には近くからかき集めたであろう倒木や瓦礫で構成された急ごしらえのバリケードが設置され我々の行く手を阻んでいた。

それをキーゼル達工兵に依頼し爆破処理を施して前進を続ける。

第一分隊は当初の予定より早く、かつ少ない損害で目標としていた橋の前面を占領した。

敵は橋の対岸一帯を主陣地としているらしい。予想通りの展開だ。

各分隊長を集め、最終調整をする。

懸念していた橋上の障害は確認できなかった為、工兵は待機することになった。

攻撃開始は09：00と下達した。08：55から突撃支援射撃を開始するよう中隊本部に要請する。

橋対岸への突撃支援射撃は三段階に分けて開始される。まず、煙覆射撃がぐわえられた、本来ならここで工兵が障害処理をするはずであったが障害がなかった為これは中止となった。続いて榴弾が六ヶ所に着弾した。8cmの迫撃砲弾が降り注ぎ轟音と共に土砂を巻き上げる。

味方からの激しい砲撃を間近に見るのは初めてなのか、多くの兵が首を上げてそれを眺めていた。

そんな彼らにリッペ軍曹が隠れるよう叱責する。

最終弾の弾着と共に第一分隊が喊声を上げて突撃を開始した。

濃密の突撃支援射撃だったにも関わらず敵の火点は未だ多数が生き残っており、第一分隊を猛射した。

第一分隊は半数近くの隊員を失いながらも橋の対岸にとりつくことに成功した。しかし、敵はそこから下がるつもりはないらしく激しい銃撃戦となった。

私は修正した座標を中隊本部に送りさらなる砲撃を要請した。第一分隊を巻き込む危険は承知であった。

小隊無線手のフォルトナーと中隊本部の無線交信は長かった。当初、無線の調子が悪いのかと思ったが対岸の戦況を睨みつけるように見ながら耳を立てると「座標が間違っていないか？」と中隊本部がごねているようだ。

フォルトナーが何度の催促しても中隊本部は座標の再確認を促してくる。私はフォルトナーから半ば奪い取るように送受信機を受け取ると「座標に誤りはない！」と怒鳴りつけた。

こちらの鬼気迫る剣幕が通じたのか、ようやく砲撃要請が受け取られた。

その間にも対岸の戦況は悪化していた。敵弾をかいくぐってリッペ軍曹が戻って来た。彼は自分たちの前に砲撃を落とせと言ってきた。同じことを考えていたようだ。

すると待ちに待った砲撃が降り注いだ。我らの迫撃砲は優秀で第一分隊を巻き込むことなく的確に敵陣地へと降り注いだ。その砲撃に合わせてリッペ軍曹は補充の人員を引き連れて対岸へと駆けていった。

砲撃は敵の陣地を粉碎したらしくリッペ軍曹たちはほとんど損害を負うことなく対岸へとたどり着いた。

それでも対岸からはドイツ語に交じって聞きなれない言語（おそらく英語）の怒声や叫び声が聞こえてくる。

敵はまだ橋の対岸を諦めていないようだ。

敵の逆襲を阻止する為突撃破碎射撃を要請した。座標を記した紙をキールに持たせて中隊本部へと走らせる。

無線の問答はもうこりごりだった。

斥候の情報から橋のすぐ先に鉄条網があるのはわかっていた。キーゼルにその処理を依頼し、私はフォルトナーを連れて橋を渡った。

それで甲高い風切り音が鳴り響いた。砲撃だ。

私は走る速度を上げ近くにあった側溝へと飛び込んだ。

腹に響く振動と耳が痛くなる轟音。砲撃はすぐに収まり損害を確認する為に立ち上がるとフォルトナーがいない。まさかと思った矢先にフォルトナーが橋からやって来た。その後ろにはキールとアーデルベルトの姿もあった。彼らは砲撃を受ける直前で橋を引き返して難を逃れたようだった。安堵の笑みがこぼれた。

しかし、第一分隊には負傷者がでた。アーデルベルトに処置を任せると状況を確認する。そこへまた砲撃が降り注いだ。今度は味方の砲撃だ。

敵は橋を奪い返そうと攻撃を仕掛けていた。それを第一分隊が押し返している状況だ。作戦通りならこれを第三分隊が支援する手はずであったが見当たらない。

そこへ中隊本部から第二分隊正面がJaboの襲撃を受け圧迫されているという。

そのころには第一分隊正面の敵は橋の奪還を諦めたようで後退していた。ちょうど合流した第三分隊を第二分隊の支援に回し、第一分隊には追撃を命じた。

橋の戦闘は比較的小康状態に陥っていた。A道方向からは激しい砲爆撃音が断続的に響いていた。

10：00ごろ態勢を整える為、進撃を停止させるべく第二、三分隊にキールを伝令に向かわせた。私はフォルトナーを伴って第一分隊へと向かう。

そこへ、第一分隊のフ란ツ二等兵が捕虜を連れてやって来た。イギリス兵だ。

この哀れなイギリス兵が一人でうろついているところを捕まえたのだとフ란ツが胸を張り、鼻息荒く報告した。この年若い兵の功績をねぎらい捕虜を簡単に尋問した。

イギリス兵は口を割らなかった。捕虜になってなお毅然とした態度で我々と向き合った。

捕虜を中隊本部に後送し、第一分隊を追いかける。彼らは想像よりも奥地へと浸透していた。リッペ軍曹から報告を受けつつ現状のラインを維持するよう指示を出した。

帰り道でフォルトナーが敵の放置された弾薬箱を見つけた。中には弾薬が満載されていた。ここに来るまでもヤンクの背囊と思わしきものも落ちていた。敵は相当切羽詰まっていたのか、この程度の弾薬なら置いて行っても構わないという余裕の表れなのか判別はつかなかった。

次の攻撃に備えて警戒を維持したまま分隊ごと交代で食事をとらせようとした。

工兵分隊は予定通りいき、第二分隊もシャハテル伍長の指示で分隊内ですでに食事を始めていた。しかし、第二分隊は食事中にJaboに遭遇するという不幸に見舞われた。

問題は第一、第三分隊であった。

警戒につく第一分隊と第三分隊が交代する手はずであったが第三分隊が現れたのは11：00ごろであった。

急いで交代するようザルツフント伍長に指示を出す。ちょうど報告に来ていたリットベルク伍長勤務上等兵に案内を頼んだ。

ザルツフント伍長は命令を受けると何故か部下を整列させた。彼には彼のやり方があるのだろうと見守るが部下が全員整列するまで待っている。後で知ったことだが彼は最近下士官に昇任したばかりであったらしい。

そんなこんなでまごついていると上空から異音が聞こえた。

見上げると空から敵のJaboが急降下を始めていた。「Jaboだ！！」誰かが叫んだ、私だったかもしれない。森の中に逃げ込もうとしたが嫌な予感がする。敵機が急降下してくる先は森の中だ！

「橋を渡って対岸まで逃げろ！」声を張りながら駆けだした。それを聞いたリットベルクとザルツフント伍長も駆けだした。他の部下は見当たらない。

ロケット弾が森を焼く。向こうに残った兵たちは無事だろうか？

敵機が去ってから対岸に戻ると森の端や土管の中からわらわらと部下たちが出てきた。ロケット弾はわずかにそれたようだった。

ザルツフント伍長に直ちに部下をまとめて第一分隊と交代するよう指示を出す。

この攻撃で足を負傷した第三分隊のヨッシフ上等兵を連れて私は中隊本部へと向かった。

中隊本部に戻り情報をすり合わせる。

A道に行く第二分隊は、当初鉄条網を除去し予定より多めに進んだが、敵の反撃で手痛い損害を負ったようで結局砂利山まで後退するハメになったようだ。

情報交換を終えるとヨッシフ上等兵を中隊本部に預け、私と小隊本部も簡単に昼食を済ませる。

11：30には第一分隊と第三分隊が交代した。

小隊本部に分隊長を集め次の攻撃開始は12：00だと告げた。準備射撃は11：50からの予定である。

第三分隊に手早く昼食をとる様伝達すると、A道の警戒に出ていた工兵分隊のクロード（ワサスキーだったかもしれない）が報告に来た。

曰く規模不明の敵が接近、戦闘になっているそうだ。撃退するよう指示を出そうとするとかすかに異音が聞こえた。橋で上空から聞こえたあの音だ……。

「Jaboだ！！」「Deckung!」という絶叫が聞こえる。すぐに砂利山から逃げてくる兵の姿がちらほらと見えた。

現在我々が居るのは少し開けた場所である。上空から見れば格好の的であろう。

私は近くにあったコンクリート製のトンネルの様な構造物の中に頭から飛び込んだ。

ロケット弾は広場ではなく砂利山付近に命中した。トンネルから這い出るとここまで逃げてきたシャハテル伍長がぎょっと目を見開き「そんなところに」と呟いた。

私はすぐさま駆け出し砂利山付近の損害を確認に向かう。そこは酷いありさまだった。

そこら中に死体や負傷者が転がっていた。そしてこの好機を逃すほど敵も間抜けではない。

「生きてるやつは前へ出ろ！ 負傷者は後ろへ下がれ！！」何度も同じことを叫び混乱を沈めた。シャハテル伍長は率先して前へ行き生き残った第二分隊をまとめあげ敵の攻撃に備えた。

小隊本部も前に出て前線に加わる。幸いにも第二分隊のMGは生き残っており、MGと阻止砲撃のおかげで戦線の崩壊は避けることができた。



左
双眼鏡で敵情を注視する筆者（中央）
手前にいるのがシャハテル伍長である。

我々の抵抗に敵は攻めあぐねており、互いに睨み合う膠着状態に陥った。

私はこの状況を打破すべく生き残っていたキーゼルと中隊本部から支援に来ていたコワルスキーを連れて敵の側面へと回ろうとした。

敵は道に沿うように展開し道の正面にいる第二分隊ばかりを警戒していた。にじり寄る私たちには気づいていない。コワルスキーを援護に残しキーゼルと共にゆっくりと進む。すると道を姿勢を低くした敵がゆっくりと歩てくるのが見えた。アメリカ兵だ。

敵の装備、目の色までわかる距離まで近づいてきた。ゆっくりとMPを構える。

不意に敵が止まった。目が合う。彼はハッとした表情をすると伏せるように隠れた。運がいい奴だったようで丁度こちらの射線からも隠れてしまった。

私は意を決して走りこんで距離を詰めるとそのアメリカ兵目掛けてMPを掃射した。

短連射をすると一気に距離をとる。倒したかはわからない。コワルスキーの位置まで戻るとキーゼルにこのラインを守るように伝えて砂利山へと戻った。

砂利山には補充兵を受け取ったシャハテル伍長とザルツフント伍長が居た。彼らと呼ばせつつフォルトナーに先ほど見つけた敵の位置に砲撃を頼むよう伝える。

攻撃開始時間たる12：00はすでに過ぎていた。命令を正確に実行するリッペ軍曹のことだ第一分隊だけでも攻撃を開始するだろう。このままでは彼らが孤立してしまう。

シャハテル伍長とザルツフント伍長に命令を伝達する。

第二分隊はA道向かって右を第三分隊は向かって左を進ように命令した。同時に準備砲撃も要請する。

準備砲撃の弾着を待って攻撃を開始した。小隊本部もそれに続く。



命令を下達する筆者（中央）とそれを聞くシャハテル伍長（左）とザルツフント伍長（右）。

攻撃は速やかに実行された。

敵は各所で粘り強く抵抗したがその一つ一つを我がドイツが誇るMGで制圧し前進する。

第二分隊が破壊した鉄条網は敵によって修復されていた。先ほどの逆襲は陣地を修復する時間稼ぎだったのかもしれない。

しかし、応急的にこしらえた鉄条網では我々を阻むことはできなかった。

キーゼルの指示のもと工兵たちは素早くかつ機敏に動き、ものの数十秒で鉄条網を開設して見せた。

第二分隊の前進は工兵の支援もあって順調に進んでいた。

一方で第三分隊の前進は遅々として進まなかった。ザルツフント伍長の慎重な指揮も要因の一つではあろうが、分散し潜伏する敵や地雷原に阻まれていたのだ。

このころになるとあれだけ狂った様に撃って来た敵の砲撃は一切飛んで来なくなった。あの恐ろしいJaboもだ。

敵は鉄条網に加え道路上に地雷原も構築していたようだったが工兵出身の私の眼はごまかせなかった。敵の地雷原は偽地雷原だったのだ。

相当に慌てていたのか地雷原表記は何故か我々の方を向いていた。私ならこの偽地雷原の中にも一つだけ本物

を混ぜただろう。

A道の右側を第二分隊、小隊本部、工兵分隊の順で進んでいく。

ふと、聴きなれない言語が道を挟んだ反対側（道路向かって左側）から聞こえてきた。

もしやと思いゆっくり顔を上げると道の反対側に二人のアメリカ兵の頭が見えた。こちらに気づくことなく正面を警戒している。

我々はいつの間にか敵を追い越していたのだ！

敵に気づかれていない今がチャンスである。MPを構え姿勢の高い敵に狙いをつけた。

パパッと小気味いい破裂音と共に射撃が始まるがすぐに止まってしまった。弾切れだ。

こんな時に！ と悪態をつきながら弾倉を交換する。流石にここまでされれば我々の存在に気が付き、5mもない至近処理で激しい銃撃戦へと発展した。

手榴弾も使用したが木に阻まれて思うように飛ばず敵の手前に落ちてしまった。

このままではがちが明かないと少し後ろにいたキーゼルを呼び寄せる。彼に反対側の敵を排除するように頼む。

私とフォルトナー、キールの三人でできうる限り最大火力を持ってキーゼル達の突入を支援した。

断続的な射撃音の後で静かになった。顔を上げるとキーゼル達が反対の敵を倒した様だった。

私と小隊本部も道路上に出て反対斜面を見下ろすように取りついた。

周囲を見渡すと第三分隊の姿が見えない。私たちは敵陣に食い込むように突出する形になっていた。

フォルトナーが頭を下げると切羽詰まった声色で言い放った。私はそれに素直に従う。頭上でStgが発砲され酷い耳鳴りに襲われた。

敵が近づいていたのだ。先刻キーゼル達が葬り去った二人のヤンクを探しに来たのかもしれない。身を隠す暇もなく哀れな子羊は大地に倒れ伏した。



左： A道を進む小隊本部

筆者（右）とフォルトナー（中央）、キール（左）

第三分隊はどこにいるのか？ この問いに答えられるの当の第三分隊のみであろう。私は彼らの正確な位置をつかめていなかった。

キールを第三分隊を探し第二分隊のラインまで前進するよう伝令にだす。

そこへシャハテル伍長が報告に現れる。第二分隊は予定していた位置まで進出。しかし、敵のMGに前進を阻まれているのだという。

報告を受けるとキールが戻って来た。第三分隊は我々の後方で停止しているのだという。

第三分隊が前進すれば状況が動く！ それは間違いなかった。私は第三分隊の進出を心待ちにしていた。

地図を見るとふと何かがおかしいと感じた。地形に違和感を感じるのだ。

周囲の地形と地図を何度も見比べる。やはりおかしい。報告のあった現在位置と実際の位置が違ったのだ！

我々は予定の位置まで前進などしていなかった、工程の半分ほどしか進めていなかったのだ。

直ちにシャハテル伍長にそれを伝える。彼も何度か周囲の地形と地図を見比べるとハッとした顔になった。

第二分隊に前進を命じる。この時になっても期待していた第三分隊は現れなかった。

第三分隊は状況を理解しているのか？ 苛立ちがつのる。

私は自ら第三分隊へと赴くことにした。第三分隊はすぐに見つかった、小隊本部のすぐ後ろにいたのだ。

第三分隊は緩やかなカーブを描くように斜面に展開していた。斜面下の敵を止めていたらしい。

ハッカー等兵を捕まえると分隊長の位置を聞いた。ザルツフント伍長は斜面の下にいるそうだ。

第三分隊の作るカーブをなぞりながら斜面を下ると、視界の端で何かが動いた気がした。

注視すると木の根元の不自然な丸みを帯びた物体が見えた。

分隊の作るカーブからはいささか外れている。前に出すぎたものがあるのだろうか？

「あれはなんだ？」と声を発すると物体が慌ただしく動き始めた。今思えばあれは銃を構えようとしていたのだろう。木の根に阻まれたのか動作は酷く緩慢であったが……。

その動きに長年戦場で培いこれまでも幾度となく助けられた勘が警鐘を鳴らした。「敵だ！」鋭い声で警報を発しMPを撃つ、キール、フォルトナーもそれに加わるがフォルトナーが敵弾を受け倒れた。

しかし周囲の第三分隊はいっこうに射撃に加わらなかった。なぜ戦わない！！

「何している撃て！！」と叱責するとようやく射撃を始めた。

フォルトナーをキールに任せ、私はザルツフント伍長を探した。

彼はすぐ見つかった。ちょうど向こうもこちらを探していたようであった。

私はここで賭けに出ることにした。斜面を守る第三分隊をA道に上げ、第二分隊と協同して一気にA道の突破を図ったのだ。

斜面が空くことで登って来た敵に背後を取られるかもしれないがこのままではジリ貧だ。

ザルツフント伍長に素早く命令を伝えると、彼は第三分隊を素早く道路上に上げた。

そこで問題が起こった。ザルツフント伍長は部下を何故か整列させたのだ。

何をやっているのか……！ 「教練をしている場合じゃねえんだ！ ここは戦場だぞ！！」ザルツフント伍長を厳しく叱責する。私にケツをたたかれてようやく前進を開始した。

砲撃を要請して前進する。すぐに二重の鉄条網が行く手を阻んだ。さらには敵のMGが激しい射撃を浴びせかけてきた。

敵も必死なのか抵抗はこれまでに最大のものであった。

キーゼル達工兵が鉄条網を処理し、じわりじわりと敵に詰め寄る。

当初は位置がわからなかった敵のMGの位置も、接近することで判明しすぐさま砲撃を要請してこれを沈黙させた。

要請した砲撃は激しく抵抗する敵の集団を的確に捉え、粉碎した。すかさずシャハテル伍長の第二分隊が敵陣に突入しこれを制圧した。

敵陣地はまさに死屍累々と言わんばかりであった。そこかしこに死体が転がり、重傷者が呻いていた。

実戦経験の浅い兵たちはそれを茫然と見つめるばかりで立ち止まってしまっていた。

第二分隊は前進、第三分隊は捕虜を集めるように指示を叫ぶ。

後ろを振り返ると斜面の茂みの中からアメリカ兵が飛び出してきた。その勇敢な敵兵はこちらを見つけると隠れることなく喊声を上げて突っ込んできた。

彼が腰だめで乱射した短機関銃はそのほとんどが明後日の方角へと飛んでいき、我々の情け容赦ない射撃で主

の元へと旅立った。

周囲に潜む残敵を掃討し、我々はようやく目標地点へとたどり着いた。

突撃支援射撃を要請し第二、第三分隊に突撃準備をさせる。キーゼルには背後からの襲撃を警戒させた。

私の前には四人の捕虜が残された。捕虜はそのほとんどが傷を負い、重傷のものばかりであった。

捕虜を連れていく余裕はない。私は東部戦線で学んだ捕虜の対処方法をここで実践した。

突撃支援射撃が終わると私の笛の合図で一斉に突撃を開始した。

中隊本部に突撃開始を無線で報告し、後に行く。

私が着いた時にはほとんど終わっていた。

本部と思われる場所では最後まで抵抗したであろう敵の死体が転がっていた。最後に自爆したのかバラバラになった者までいた。

我々の突撃に呼応した第一分隊もそこにいた。流石はリッペ軍曹だ。

すぐさま逆襲対処へと移る。第一分隊は上、第二分隊は後方、第三分隊は谷底を監視するように命じた。

手早く兵隊が動く中、第三分隊の動きは緩慢だった。ザルツフント伍長を呼ぶが現れない。聞けば行方が分からないそうだ。

その場にいた最上級者であるグローバー上等兵に指揮を継承するように命じ中隊本部へ目標確保と連絡を入れた。

周囲を見渡せば疲労困憊ながらも達成感を感じている部下たちの顔があった。

小隊は任務を達成したのだ。

END